「伝統と創意」
広報紙 書くよろこび
第8号

■「書を育む」座談会 2～5面
■文化人インタビュー 6・7面
■手書き文字ばんざい！ 8・9面
■全日本小学生・中学生書道紙上展 10面
■全日本高校・大学生書道展 11面
■全国シルバー書道展 12面

公益社団法人 日本書芸院
無料

美しい心は 手書き文字から

私たちは児童生徒一般すべての人々の書写の環境を整え、豊かな心を取りもどすため総力をあげて「手書き文字の振興」に取り組んでいます。

寄稿

文部科学省
初等中等教育局長
前川 喜平 氏

文化の継承・発展へ 学習指導要領を改善

昨年の夏、東京国立博物館で開催された特別展「和様の書」では、我が国を代表する数多くの書の名品が展示されました。中国から伝来した漢字の書は、中国文化の影響を受けながら発展しつつ、遣唐使廃止以降は、日本独特の優美な筆致である漢字と仮名が融合した「和様の書」が完成しました。独特な技法を用い染料や顔料で色付けしたり、文様を刷り込んだり、金・銀の箔加工などの装飾を施した料紙に書かれた仮名の書は、背景と書の表現が一体となっており、言葉にできない美を放っていました。この展覧会を通して我が国の文字文化の広がりと豊かさを改めて認識させられました。

平成23年度より小学校、24年度より中学校の学習指導要領が全面実施となり、本年度からは高等学校学習指導要領が年次進行で実施となっております。今回の改訂では、書の文化に関する学習や鑑賞学習を充実し、総合的に書についての理解が図られるよう改善を図りました。中学校の国語科書写から高等学校の芸術科書道への円滑な接続を図るため、例えば、中学校では、身の回りの多様な文字に関心をもつことで、文字を手書きすることの意義に気付かせたり、文字の芸術性に関心を向ける素地を養ったりするなどの文字文化に関する認識を深める学習を新設しました。また、高等学校では、中学校の学習を発展させ、「生涯にわたって書を愛好する心情を育てる」ことを目標に加えました。さらに、書写・書道教育を通して思考力、判断力、表現力等を高めるため、作品について互いに批評し合うなど、言語活動の充実を図っております。

近年、スマートフォンなどの普及によって、画面タッチによる文字入力が広がっています。しかし、一方では美しい文字を手で書きたいという、いわゆる「美文字」がブームになり、また、平成24年度に行った「国語に関する世論調査」においても、「今後もなるべく手書きで手紙を書くようにすべきである」という考え方に近いと答えた人が、前回の平成16年度調査よりも上回るなど、手書きの魅力が世の中で再認識されてきているようです。

こうした新しい学習指導要領の実施や、世の中における手書き文字への関心の高まりの中で、公益社団法人日本書芸院が進める「文字・活字文化の日」の記念イベント「手書き文字ばんざい！」や全世代を網羅する書道展の開催、文字文化を伝える広報紙等の発行は、書の伝統と文化を継承し発展させる上で、大きな役割を果たしていると言えるでしょう。

日本書芸院の活動が、これからも手書きの大切さや我が国の文字文化のすばらしさを広げ、深化させることを期待しております。

一、日本の伝統文化芸術を守り育もう
一、すばらしい日本語の心を伝えよう
一、心を映す文字をより大切にしよう
一、書く楽しさ喜びを通して健やかな心を養おう
一、美しい文字で潤いのある豊かな人生を送ろう

文字・活字文化振興法の骨子

【目的】
文字・活字文化の振興策を推進し、知的で心豊かな国民生活および活力ある社会の実現に寄与する。

【基本理念】
国民が等しく豊かな文字・活字文化の恵沢を受ける環境を整備する。国語が日本文化の基盤であることに配慮する。学校では「言語力」をはぐくむ。

【責務】
国や地方公共団体は文字・活字文化の振興策を策定し、実施する責務がある。

【地域での振興】
市町村は公立図書館を設置する。国や地方公共団体は司書の充実など人的体制を整備し、資料の充実を図る。学校図書館を開放する。

【国際交流】
文字・活字文化の海外への発信を促進。翻訳の支援をする。

【文字・活字文化の日】
国民の関心と理解を深めるため、十月二十七日を文字・活字文化の日とする。

〒540-6591 大阪市中央区大手前1丁目7番31号OMMビル7階
TEL 06-6945-4501 FAX 06-6945-4505 Eメール info@nihonshogeiin.or.jp
ホームページアドレス http://www.nihonshogeiin.or.jp/

平成26年（2014年）2月発行 年1回発行
編集・発行人 公益社団法人 日本書芸院 理事長 杭迫柏樹

特別ゲスト×日本書芸院 座談会

木下 博夫氏　国立京都国際会館館長(元国土事務次官、国土交通省顧問)
筒井 紘一氏　京都造形芸術大学教授(今日庵文庫長、茶道資料館副館長)
薮中 三十二氏　立命館大学特別招聘教授(元外務事務次官、外務省顧問)
※五十音順

聞き手
杭迫 柏樹氏　日本書芸院理事長
吉川 蕉仙氏　日本書芸院副理事長
真神 巍堂氏　日本書芸院副理事長

日本文化が世界に誇る「書」。現代の生活や教育の中で、どのように育み、国際社会に向かって発信していくか。国立京都国際会館館長の木下博夫氏、茶道資料館副館長で京都造形芸術大学教授の筒井紘一氏、元外務次官で立命館大学特別招聘教授の薮中三十二氏を招いて、様々な課題を話し合った。

※座談会は平成25年(2013年)11月26日に行いました。

日本の未来 育むために

書を海外にプレゼン

木下(きのした) 博夫(ひろお)氏

杭迫　今日は、木下博夫先生、筒井紘一先生、薮中三十二先生をお迎えして、私たち日本書芸院のメンバーとともに、日本文化や書道を通じた人間の育成などをテーマに語っていきたいと思います。

吉川　副理事長の吉川蕉仙と申します。先生方のお話をたっぷりと伺って、いろいろ考える機会になればと楽しみにしています。

真神　副理事長の真神です。筒井先生とはお茶の関係で、薮中先生とは書道を通じて知己があります。薮中先生のご紹介で、今回は木下先生にも出席をお願いしました。

木下　筒井先生にお会いできましたので、少しお茶の話から。私は京都大学の学生時代に、ほんのちょっとだけ「心茶会」に入ったことがあります。そんなこともあって、最近、国際会館に茶道部を立ち上げました。先日、たまたま、筒井先生が、お出しになった『茶道具は語る』(淡交社)を読む機会がありまして、お会いできるのならと、足を運びました。

筒井　私は、途中で書を挫折したものですから、書を語る座談会には出席できませんと申し上げたんです。そうしたら、何でもしゃべってくれとおっしゃって下さった。私とは違う世界でご活躍される木下先生、薮中先生も来られるので、話を承れれば、と思った次第です。

薮中　外務省時代も日本の文化をどうやって世界に発信するかを考えてました。文化は日本の持っている強みだろうなと、ずっと思ってました。でも、自分たちで、それがどのぐらいの価値があるのか、余り分かっていないところがあります。こういう場で、ぜひ教えていただければと思います。

真神　裏千家の大宗匠が、ずっと外務省の研修を続けていらっしゃいますよね。外務省研修所に入りますと、お茶の稽古をするんですって。そして、卒業式に大宗匠のお話があるのですね。

薮中　そうなんです。不可欠の講座になっております。

真神　赴任されたキャロライン・ケネディ駐日米大使が早速、お茶の席に招かれた。とにかく外国人が来られたら、まずそれですよね。木下先生に伺いたいのですが、外国人がどういうふうに日本を見て、日本の文化を理解しているか。その辺りをお話しいただけたら、我々が知らない書道の見方とか、あり方を教えていただけるのではないかと思っています。

木下　お華とか能ですと、国際会館の催事の前のイベントみたいなことでやっていただいたりしてます。うちには書の力をプレゼンテーションする時に使ってもらえる場も、ホールもありますので、ぜひ活用していただきたい。

なぜ、そんな話をするかというと、北京五輪の時、中国は「何」を使って、自国をプレゼンテーションしたか。印刷とか、漢字とか、そういうものを大変強調したと記憶しているのです。だから、2020年の東京五輪の前後は、ぜひ書道の力を見せていただきたい。日本国民が書道をもう一回見直すいい機会になるのではと思います。文化活動の一環として、ぜひ、お考えいただいたらどうかなと。

杭迫　そういう話を待っておりました。

木下　イベントホールのようなところで皆さんの力作を展示して、日本文化の一つとして大変力を持っている書道をご紹介していただいてもいいと思います。私たちも最高のサービスでやりますので。

関西は防災とか、経済とかを広域連合みたいなことでやっていますね。文化もそうですね。河合隼雄先生(心理学者、元文化庁長官)も文化力について、いろいろ言われましたけど、京都だけじゃなくて、大阪とか、神戸とか、そういうところと連携して、トライアングルで東京と違う都市軸を発揮することが、関東にない魅力を関西で発揮してほしいですね。

日中韓交流し漢字守る

筒井　平成25年(2013年)11月に日本国連協会と、裏千家の千玄室・大宗匠が中心になって「第8回東アジア茶文化シンポジウム」と「第8回パネルディスカッション　東アジアの文化と平和」を韓国で開催しました。中国、韓国、日本でお茶を研究している人たちが参加しましたが、そこで、中国側の周瑋生・立命館大学教授と話した際、日・中・韓の3か国が中心になっての漢字文化のイベントを持ち回りで、できないかという話も出ました。

杭迫　そうですか。私は9月に韓国の光州であった文化庁主催「第5回日中韓文化大臣フォーラム」に参加しました。その時に、何と、ハングル文字の韓国が、書道展をやりたいということで、文化庁に申し入れがあって、それで芸術院に保管されている作品と、日展に出した私たちの作品を32点並べました。大臣の方々に書の説明をするというので、新井光風さん(読売書法会常任総務)と私が参りまして、作品の説明をさせていただきました。韓国から書道展をやってほしいという申し出があったというのが、ちょっといいなと思いましたね。

筒井　でも、韓国では今の若者は、ほとんど漢字が分からないでしょう。

杭迫　私が、向こうの書家の家に行きましたら、広い場所で若者が日展に出すような大きな漢字作品を並んで書いているんです。びっくりしましたね。こんなに盛んな面があったのかと。

薮中　今、日本と中国と韓国で、国と国との関係がギクシャクと難しいところがありますけどね、漢字とか、お茶とか、そういう文化の中で、よくよく考えてみると、随分、昔から交流もあったよねということで、我々の関係をもっと良くすることができるんじゃないかと思います。

漢字について、僕は実情をよく知らないですけど、40年ぐらい前に韓国に赴任しましたが、ハングルしかないわけですね、新聞にしても何にしてもね。町の中が全部ハングルです。それ

国際的人材 必要なのは

自国の歴史 語れる人に

薮中（やぶなか）　三十二（みとじ）氏

でも、韓国の若い人が漢字を勉強していると聞いて、驚きました。

杭迫　熱心にやっていましたね。

薮中　中国は中国で、いわゆる漢字というのが簡略化されていますね。そうすると、書の世界というのは中国の中で、今どんなふうになっているのかなって、先のお話を伺っていて思ったんですけどね。

杭迫　中国は、今はものすごいですよ。老・中・青と世代ごとに分かれて競い合う形をとっていますね。

木下　私は国際会館の館長に就任する以前、阪神高速道路公団にもいました。そこの理事長をされた浅沼清太郎さんは、大阪日中友好協会の会長もされて、私も協会を引き受けました。上海では児童の書画コンクールがありました。今は、この情勢ですから、中断していますが、いつか復活できればと願っています。この間、上海博物館へ行ったら、書道コーナーもしっかり守られていました。国と国同士のメンツの中で解きほぐせないところを、前進させていくのは文化力じゃないかなと思いますね。

薮中　中国の人は、日本に来るときに、書を持って来てくれるのですね。だから、お互いに、分かり合えるところはありますしね。今の話で、非常にいいなと思ったのは、韓国がそこで落っこちちゃうんじゃないかと思っていましたけど、韓国でもそうやって勉強されている。あるいは、やりたいというのは、本当に素晴らしいことだと思いますね。

真神　日本は書道を日本文化の代表みたいにしている割には、学校教育では非常にうとんじられています。書芸院やほかの団体も含めて、何とか公教育で、もう少し書道に力を入れてほしいと願っているのですが、受験教科偏重の中で、書道も含めて芸術教科がついつい少なくなってくる。特に、週休2日制が導入されてから、その影響もあった。

薮中　今は、小学校では書の時間は？

真神　ありますが、「書写」といい、書道とは言わない。書写ですから、国語科なんですね。だから、国語の先生が週に1時間持つというのが原則ですね。ところが、国語の先生はついつい自分の得意な国語の方に力を入れてしまうのが現状です。

薮中　世界との関係で、日本に必要なものは何かというと、グローバル化とか言われていますよね。グローバルに仕事をしなきゃいけない、グローバルな人材を育成しなきゃいけないと。そのために、何が必要かというと英語だという。あれは、もう完全に誤った処方箋だと思っています。

本当のグローバルな人材というのは、そんなことで育てるんじゃない。英語なんてのは、1年間、これを暗記しろといって、毎日、暗記させたら、しゃべれますから。そんなのに小学校から時間をかけるというのは、僕はどうかなと思うんですね。本当のグローバル人材というのは、一つでも何か日本の文化というのを語れることです。これは大事です。一つでもいい、二つでもいい。そのためには、自分で何かしておかなければならない。いいものを見なきゃいけないんですね。それをやっておくことが、これからのグローバル化に、必要なことだと思っているんです。

木下　薮中さんのように海外で活躍された人が今、言われたことはしっかりと受け止めたい。もちろん、日本の文化の中で自分が何を得意とするか、それは多種多様ではありますが、海外の人は、それを期待しているんですよね、日本に対して。

筒井　もう一つだけ申し上げるならば、日本史です。今、日本史は選択で、世界史は必修で取らせるんです。日本史は選択ですから、うちの学生たちに聞きますと、文学部であっても3分の1もいませんね。確かに世界史も大事だけど、日本史をどうして、国が必修で学ばせないのか、それが非常に不思議です。

木下　私は、ローマへ出張で行った時に、イスラエルの女性教師に会いました。何を重要視しているかと聞いたところ、三つ挙げたのが非常に印象的です。一つは国語です。もう一つは論理学。最後に、やっぱり、歴史だと。彼女は日本の教科書を送ってくれと言ったので、資料を送った覚えがあるんです。ああいう国っていうのは、国の存在ということを非常に意識しているから、歴史の位置づけも確かに重要なんですね。

薮中　G8サミットがありまして、8か国のシェルパが集まるのです。私もシェルパをやったことがあります。総理あるいは大統領の個人代表が集まります。それで食事会になりますね。どうしても歴史とか、文化とか、そういうのを知っていないとうまくいかないという感じがあるんです。向こうはローマの歴史とか、何か、その辺のところから始まるわけですが、そういう共通のものがあるのです。キリスト教とかね。でも、そのころの日本はこうだったよね、あるいは、日本の文化はこうだよねと一言言うと、ぱっと相手の尊敬の度が上がりますね。だから、日本の歴史と文化を語れるというのは、すごく大事なことですよ。

杭迫　自国の歴史を教えない国って、世界でもまれでしょうね。でも、私は、時代が一歩進むには、直前の時代を否定して、それをばねにして前に進むので、終戦後、戦前を否定するという形で、前へ一歩進んだと思うんですよ。それも、でも、30年ぐらいが限界だと思うんです。60年もたって日本はまだ……。

薮中　僕らの世代の日本の歴史についてというと、大体、司馬遼太郎を通じての歴史とか、そんな感じでしょう。『竜馬がゆく』から、『坂の上の雲』のね。しかし7世紀、日本と中国と韓国と朝鮮半島がこれだけ非常に深いつながりがあって、その時に日本はどうなっていて、どんなことだったのか、こうしたことは勉強しておかないと。

杭迫　ちょうど東京五輪が開催される2020年が日本書紀成立1300年に当たります。日本書紀には7世紀のことを、真偽はともかくとして、随分詳しく書いてありますね。

薮中　日本の歴史を学ぶ時に、注意しなければならないのは、往々にして、日本はすごかったんだとか、日本は良かったんだとか、美化し過ぎることですね。この傾向に行くことが、一つ問題があるんじゃないかなと思う。もう一つは、やっぱり、この東アジアでどれだけ交流があったか、お互いに、悪い面もあればいい面もあり、たくさん教えられたし、それから、日本からもいろいろと出ていって、お互いに勉強しようとしていたと。だから、交流っていうか、相互理解というのをそこから学んでほしいなという気がするんですね。

木下　交流があったからこそ、日本の現在の文化があるわけですよね。美化するだけじゃだめだとおっしゃるのは、私も同感です。交流があったということは、日本人は非常にそういうものに対しては積極的だったと。交流してきたからこのような文化が残った。それは、歴史の中を貫く一つのものではないかと思うのです。

書と日本文化について多様な視点から課題が提案された

環境変化と伝統の変遷

お茶も風情　書も風情

筒井　紘一氏

薮中　日本人は島国で孤立していたというのは、徳川の二百数十年だけなんですね。それ以前は、はるかに国際的です。シャムに行って、あるいは、ベトナム方面に行って、日本人町もできていますしね。6、7世紀なんて、本当に王朝全部が大和を出ていってどうしようか、というような話ですよね。何も百済とだけやっているのじゃなくて、片や新羅と高句麗と結んで、唐ともやっている。今よりはるかに国際的な外交をやっているんです。

杭迫　江戸時代は鎖国時代と言われてますが、結構、交流が多かったんです。（外国趣味の）蘭癖大名と呼ばれる人もいた。

筒井　（江戸時代には）朝鮮通信使が果たした役割も大きい。教科書であまり教えないけど、あれだけの通信使たちがやってきて情報を入れてくれた。交流というのは絶対大事です。

真神　建仁寺の塔頭にも、その寺の名前を書いたものが半分以上は朝鮮通信使なんですよ。うちもそうです。大中院、西来院、常光院、霊洞院、霊源院、全部が朝鮮通信使が書いているのです。うちの寺は寛永13年（1636年）の第4回の通信使が来て書いているのです。

杭迫　私は静岡県の遠州・森町生まれです。あの田舎の町でも朝鮮通信使の書いた額が寺に残っているのです。ですから、結構、交流が深かった。

筒井　朝鮮通信使は長崎に入って、江戸まで行くんですね。その途中、途中で泊まっていく。広島県呉市の蒲刈というところに必ず船が、停まるんです。ですから、蒲刈では通信使に対する接待の食事文化ができました。江戸の享保年間には初めて象が入って来ます。象を連れて江戸まで上がっていく途中、京都を通るんです。京都では建仁寺に泊まるんですが、京都の人たちがみんな象を見に行くわけです。表千家六代の原叟（宗左）がその象を見まして、すごいと思ったんでしょうね。自分で作った茶碗に「象太郎」と名付けた。

真神　いろんな影響があるんですね。

木下　2015年には国際会館で世界工学会議（WECC2015）という会合が開かれます。工学と技術革新、社会とか、人間とのかかわりについて様々な視点から議論されると思いますが、そこで、私が書芸院の皆さんにお尋ねしたいことがあります。

今は自動ドアになったがゆえに、子どもたちは、ドアは自分から開くと思ってしまって、いわゆる「所作」や「動作」というものが変わってきた。また、床の間が無くなったことが、我々の生活の中にどう影響していくのか。床の間が無くなると次は生活の中で一体、どう影響していくのか。

そういう環境の変化と書道とを、どう結びつけて解決していくのかと。学校のカリキュラムの中の位置づけとか、もっと生活の中になじんだ書道のために、何をみんなでサポートしていくといいのか。

筒井　書もそうかも知れませんけど、お茶も一緒です。それこそ、床の間が無いわ、どうなるのかなと思っています。茶道を文化として大成させてきたのは日本です。お茶はツバキ科カメリア種で、北限があります。韓国は慶尚南道の辺りしかお茶が採れない。中国も揚子江より北というのは余りなかった。ですから、日本みたいにあちこちで採れて、それを飲むことでもって、文化的なものへ高めてきたというのは余りないんです。

木下　書を書く時、「硯ですりながら心を清くする」というのが、大切なんだよ」と親から教えられた。墨の減り方の傾き具合を見て父が「それは君の心が曲がっているから」と。ところが、そのうちに墨汁が広まって、

様式美は弱くなる

杭迫　柏樹氏

それをつぎ込めばいいようになった。便利になったが、技術の発達の中で、もう少し我々は人生なりを工夫していくことを考えねばと思いますね。

薮中　日本の家というのは、昔は味わい、品があった。床の間があって、そこに、ちゃんとした書が掛けてあって、花があったでしょう。今の家は、やっぱり、無理なんですね、日本人が西欧風の家を造って。大抵、壁に掛かっているのは安物の絵ですよ。とてもじゃない、と言うようなものがひょいと掛けてある。そこは、昔の家のほうがよっぽど品が、あったなという感じになりますよね。

筒井　おっしゃるとおりですね。やっぱり、個性があるんですよ。掛け物が似合う家って本当になくなってきましたから。お茶も風情だし、書も風情だと思うんですけどね。

杭迫　書の変遷って、建築様式とずっとかかわっていますね。机の上で見る時代から壁にかけて見ると。今、展覧会の会場で見るというふうに形式がどんどん変わっていっているんですよね。

筒井　ところで、書の先生方がどうお考えなのかなというのを一つお聞きしたい。それは、書が今、デザイン化されてきてるじゃないですか。そのデザイン化されてきた書をどうお考えなのかと。平成27年頃に漢字能力検定協会のミュージアムができます。私は一応、そこのアドバイザーとして入っていますので、お聞きしたいのですが、例えば、デザイン化された絵に近いような書を全国から応募させて、評価していくようなこともいいのか。いいのか、悪いのかは、こっちの問題でしょうけれども。

悪いもの　淘汰される

吉川　蕉仙氏

杭迫　書は、非常に歴史が長いので、歴史と向き合わなかった書というのは、一時的に流行しても、泡みたいなものだから、消えてしまうと思うんです。

今の装飾化の問題については、例えば、中国では漢の時代でも趙壱という人が『非草書』という論文を書いているんですけどね。非草書というのは、草書に対して非草書ですから、草書を批判したわけですけど、これをもう一歩進めると、文字が装飾化することに対する警告だと思うんですね。これは、漢の時代から始まって、何度も何度も中国の歴史の中でそういう警告があるんですね。そういう論文が出ている。そのおかげで、中国って、装飾化の方に走らないで、今日まで、長い伝統があるんです。

日本は、歴史が浅いために、装飾化でも、何でもありという感じで、歯どめがかからないというのが現状だと思っています。

（漢字の）発生段階から完成するまで、だんだん変化して、様式が決まるまでの時代が書体変遷史です。全ての書体がそろって、それに彫琢を加えるという、美的意識を持ってどんどんいろいろやっていこうとしたのが、それから後の1700年なので、書の歴史の折り返し地点

より前のところは、芸術的に見ると面白いですけど、やっぱりね……。

筒井　そして、柳公権が余り尊敬されなくなって、顔真卿へ変わってくるというのは、どうして。

杭迫　様式美っていうのは、進んで、人の真似をして、弱くなってくるんです、どんどんと。形は美しいけど、繊細になる。それで、そこに命をもう一回、吹き込まなきゃいけないと思った人は顔真卿だけでなくて、何人かいたんですけど、その一人が、顔真卿だと思います。その骨格や線にもう一度強さを加える。

顔真卿の前に李北海という人もいますけどね。この李北海なんかが、これじゃいかんと。それをもう一つ完成度を高めたのが顔真卿だと僕は思っています。

筒井　しかし、いろんなやり方があってもいいと思うんですけど、やっぱり、自然に淘汰されていって。

杭迫　そうだと思いますね。

吉川　王羲之という人は、書の伝統を支えている一番の元みたいな感じがしますので、そこから外れていくというのは、やっぱり良くないのですね。

考えてみますと、書体の歴史というのは終わってしまったわけですから、これからは、要するに、どんなふうに書いていくかという歴史の中で我々が生きているので、いろんなことに挑戦をしていかなければならないですね。悪いものは自然に無くなっていくと思います。余りに遊び過ぎるというか、デザイン化された文字というのは、言ってみたら、書本来の姿からは随分離れている。

真神　日本書芸院というのは、余りそういう方向ではないんです。今のデザイン化というようなことじゃなくて、伝統的な方でです。

文化という財産に誇り

杭迫　書の国際化と言えば、私どもは、中国はもちろんですけど、アメリカ、スペイン、フランス、イタリア、いろいろな国に行って、そこで展覧会やエキシビションをやっています。フランスでは、それをフランス語に翻訳してもらったりしました。面白かったですね。

薮中　少なくとも、ヨーロッパは、すごく日本の文化に対して親近感を持っていますね。フランス人は日本文化が好きですね。日本の文化に、ここいいよねという感じがね。

筒井　でも、意外に日本を蔑視しませんか。

薮中　いや、そんなことはないです。僕が仕事をしていて、全部助けてくれたのはフランス人だった。

杭迫　随分、以前に、ソルボンヌ大学の礼拝堂で展覧会をやりました。その時、東洋学科っていうんですか、その主任教授という女性の人がいろいろ書について質問をしてきた時に、全然、トンチンカンで、これは表音文字の国の人は、表意文字って理解できないんじゃないかなとその時、思ったんですけどね。

木下　薮中さんに味方するわけでもないんだけど、僕は京都に長年いたからかもしれませんが、確かに、アメリカに対してのシンパシーというよりは、やっぱりヨーロッパに関して感じますね。書道の交流は世界的に、どの国も隔たりなくいらっしゃっているのですか。

杭迫　僕は随分、行きましたね。その国の大使が書のお好きな国ばっかりなんです。話は変わりますが、焼き物のろくろ。日本では時計回りに回すでしょう。ほかの国の人たちは逆回りなんですね。アルファベットなどを書くときに、時計と反対回りで書いていきますから、ろくろの回し方もそうです。それは、筆記のスタイルが漢字、平仮名が右回りですね。こんなところにも、日本文化の特質があるのでは。

木下　お華の世界も、お茶の世界も、書道の世界もみんなある程度、共通する悩みというか、連結しているんじゃないかなと思うんです。日本文化のために、どうするかといった時、それを横連携でやっていくような、そういうものが必要な気がします。

それと、学校で教える時も横連携が必要だと思うのです。童謡とか、和楽器とか、書道なんかも合わせて、ある程度、連携していけば。

真神　今のカリキュラムでいうと、国語との連携ですね。これは、普通、誰でも考えられることで。というか、国語の中へ無理やり入れてもらったいきさつがあると思うんですけど、今、おっしゃるような、もう少し幅の広い横の連携というのは余り考えたことがないんで、それはいいヒントをいただいたと思いますね。

木下　12月に文化庁主催で東アジア共生会議を催します。京都劇場でやるんですけど、そこに国立新美術館館長の青木保さんという元の文化庁長官が来られるので、全国の美術館、博物館の方々に、日本で一回、美術館、博物館の世界大会をやろうじゃないかと持ちかけているんです。もちろん京都での開催ですが。スポーツの祭典、五輪を東京でやるんだったら、京都でそういう文化の祭典ぐらいやってほしいですね。

筒井　2020年は徹底的に東京中心になりますよ。だから、今、私どもは、日本文化の一つであるお茶を通じて何ができるかを考えなければならないと思っています。率直に言うと、沈んでしまうぞ、という意識が強いんですね。

薮中　外国のいろんなビジネスの人と話をしても、東京には来ている。それから、中国にはしょっちゅう行っているという。ところが、関西、京都に来ていない人が多いんですね。

木下　関西に人を呼ぼうとすれば、関西の人も誇りと自覚を持たないといけないと。外国の人が京都に来るのは文化という財産があるからです。だけど、こちらの受け入れ側がその気をもっと示さないといけないと思いまして、今日は座談会に出席させて頂いて、書道の世界でもご縁ができたんで、ぜひぜひ、よろしくお願いしたい。

筒井　日本文化の一つは「和食」。食の世界遺産登録はうまくいきそうでしょう（平成25年12月登録決定）。京都府もバックアップをしてきました。私も委員として出席しているんですけど、世界遺産登録の上で一番、ひっかかっていたのは、高等教育機関がないということでした。各種学校はあるけれどもね。今のところ、府立大学の栄養学か何かのところに一つコースを設けようかということになっていますが、それより私の学校の方がいいと思ったのです。というのは、通信教育があるんですね。通信教育で、マスター（修士）まで行けるんです。そして、全国にたくさんいる社会人になって活躍している料理人たちが社会人入学として通信教育でやって、マスターまで和食の文化活動も位があがっていくと思います。

真神（まがみ）　巍堂（ぎどう）氏

公教育でもっと書道を

薮中　文化といえば、クールジャパンもあります。日本はクールだという、格好いいという意味なんですね。それで売り出そうという。ところが、キーワードが全部英語なんです。インバウンドとかね。このままだと、その代表選手は、アニメであり、宮崎駿の世界から、あるいは、前衛芸術家だったりと。伝統文化はどうなるのかと心配です。

吉川　クールジャパンと言えば、高校生が最近、ホットなジャパンを売り出そうと言って、ホットジャパンプロジェクトを始めたと聞いたことがあります。

杭迫　なるほど、それは面白いね。

薮中　それは何が中心になるんですか。

吉川　各方面、各分野のホットなジャパンを世界にアピールしていこうということで、僕もインターネットで見ているだけなんですけど、地域の活性化とか、全国の高校生が集まって、そういうのをやっているみたいです。8月ぐらいにできたらしいです。だから、こういうのが大きくなっていけば、クールに対するホットではないでしょうけど、同じようなことをやろうとしているのです。

真神　高校生が始めたというのがいい。何か、そこそこの地位とか年齢とかになられた人は、書というものに興味が結構あったりするんですよね。書道なら書道教育が大事だなというのは誰も反対されない。ところが、現実にはそれが全く動かないで、趣味の世界だけで終わってしまう。

学校教育はいまだに受験に焦点が当たっていますから、どうしたらそれが、もう少し、うんと小さいころからそういうものが生まれないのか。いろいろ団体が固まって、文科省なりにPRしても、実際には随分長い間、変わりませんね。何が欠けてるのでしょうか。

杭迫　やっぱり、何十年という計画でいうと、まず小学校の学校教育が基本ですね。それから、その人たちが20年、30年して大人になって、いよいよちゃんとなっていくと思うんだけど。そうなってもらいたい。

吉川　長時間にわたって大変貴重なご意見やお話を伺うことができまして、本当にありがとうございました。今回の座談会が書道や日本文化の見直しに一石を投じれば、幸いです。

心の機微 伝えてくれる

「手書き文字」は、書き手の人柄や心の機微までも伝えてくれる。各界で、活躍する著名人に、書くことの楽しみや、味わい、意味を語ってもらった。

一字一字 思い託し

日本画家
上村 淳之 氏

1933年、京都市生まれ。創画会前理事長。文化功労者、日本藝術院会員。京都市立芸大名誉教授。

絵画も文字も、自分の意思を相手に伝える媒体という共通点があります。文字は共通の認識として子どもの頃に教わって、書いたり話したりできるし、絵画は色と形で自分の内面を相手に伝えます。

絵を描く時、最初にデッサンをしますが、対象の形を的確に捉えて再現することがデッサンというのは西洋の考え方なんです。日本画のデッサンは、己の胸中に展開した世界を的確に表すということ。己の内面のデッサンがしっかりできていると、人それぞれ違った絵になります。そこで出てくるのが個性といえるでしょう。例えば、鳥の親子を描きますね。そこに表現されるのは、それに対して私がどう思っているかということ。私が孫を見て可愛いな、という思いを持っているから、その絵には親子の情愛が出てくるんです。

文字にしても一緒ですよ。花なら「花」という漢字一字にしても、花に対する思いや感覚はみんな違う。自分で持った花のイメージをきちんと「花」という一文字に託すことができて初めて、その人の文字になる。そこが活字と違うところで、だから、書という芸術があるんです。

このように胸中に熟成され、作り上げられた美しい世界を具現化するという考え方はもう日本にしかない伝統的な文化だと思います。花や鳥や石ころ、全てのものに神が宿るという想いにかられ、自然現象を見てありがたいな、美しいなと心の中で手が合わさるということ、気候も多湿で、靄がかかりやすいので、見えない世界を夢想できるということが背景にあるのでしょうか。

今の若い人は伝統のよろしさというのを否定したがるかもしれないけれど、たくさんの人が関わって時代を経て、淘汰されて残ってきたのが伝統だから、普遍性がある。絵画の世界に限らず、陋習と伝統をはきちがえてしまうのは認識不足だと思いますね。

文化功労者に選んでいただき、より引き締めて仕事していかないと恥ずかしいなと思っています。父、松篁に仏壇の前で報告したら、「よかったなあ、まだまだやで」と言っているような気がしました。確かに、まだ解明できてないことが山ほどあって、次はこういう表現の方法でもうちょっと違った面が見つかるかな、と描きながら思ってるんですよ。

父の言葉にあったのが、「写生してたら、もっとおきばり、もっと追求しに来い、もっとええとこ教えてあげるよと自然が言うてくれるんや」と。実際そうなんです。描いていて、いいなあと思ったら、あくる日またいい。重ねていくとさらにいい世界が見えていく。これが絵描きが歩いていく道。だから辞められないんです。

絵の訓練を受けた人は字もうまい。祖母の松園や父の字を見ていると、左右や太さのバランス感覚が絵の表現の中で鍛えられているのかもしれないと思います。私自身は、絵描きであって字書きではないというのをいいことに、いいかげんな字を書いてしまってますけど。文字を書くことは大嫌いだけど、ほんとは大好きなんです。いい文字を書きたいなといつも思ってます。いっぺん勉強し直さな、と思うんですが時間が足りないですね。

先が短いというのをようやく実感してるんですよ。許される時間を精いっぱい使って、一所懸命仕事していこうと思っています。一所懸命お酒も飲むし、一所懸命学生たちと遊ぼうと思っていますよ。

色紙の字には温かみ

将棋棋士
九段
小林 健二 氏

1957年、高松市生まれ。最高位の九段。600勝達成し、将棋栄誉賞受賞。著書多数。

中学時代、草野球でキャッチャーをした時、打者のバットが頭に当たり、意識不明になって、救急車で運ばれました。それで野球から遠ざかり、近所の「縁台将棋」を楽しむようになって、将棋道場に通いました。

3年生の8月ごろ、大山康晴・十五世名人に飛車、角落ちで指してもらう機会を得ました。その時、大山名人は、（私の出身地の）香川県の将棋連盟の人に「あの子はプロになって強くなる。A級八段（順位戦最高位）まで行く」と言ってくれたそうです。母は、その話を伝え聞いていたのですが、天狗になるといけないので、私がA級八段になるまでは内緒にしていました。

15歳でプロを目指して東京で修業しましたが、半年ほどで胃潰瘍、十二指腸潰瘍をわずらいました。そんな私を名古屋の板谷進先生が引き取ってくれました。師匠からは「本をしっかり読みなさい」「視野が狭くならないように〝将棋指し〟以外の人とつきあいなさい」と、生き方、人生経験の積み方を教わりました。

29歳でA級八段に。順調でしたが、人生の恩師だった板谷先生の急死もあって、スランプに陥り、31歳の時、A級から陥落。自分に嫌気が差して、何とか自分を改造しなければと、「居飛車」から「スーパー四間飛車」という戦法に変えました。野球で言えば投手が打者に転向するくらいの一大決心をしました。アマチュアの立石勝巳さんの「立石流」にヒントを得て、これに研究を重ねた。アマは形は悪いかも知れないが、何か独特の物を持っている場合がある。新しい発想が良かったのか、この戦法で高勝率を得て、年間44勝を達成しました。

板谷先生には「将棋指しは、将棋指しの字を書けばいい」と教えられましたが、A級八段になって揮毫を求められる機会も増え、ほんの短期間ですが、書道を習ったことがあります。この時、学んだのが、字はバランスだということです。これは将棋にも通じます。

座右の銘にと思っているのが「鍛錬千日勝負一瞬」。池田高校の蔦文也監督の言葉からヒントを得ました。扇子とか色紙にこの言葉をよく書きます。平成25年（2013年）9月に、小野道風ゆかりの地、愛知県春日井市で市制70周年記念事業将棋フェスティバル（東日本大震災チャリティーイベント）に招かれ、ここでも、色紙に「鍛錬千日勝負一瞬」「志在千里」と書かせてもらいました。

現在、日本将棋連盟の東南アジア地区将棋大使をしています。中国将棋、韓国将棋、タイ将棋など各国に将棋はありますが、相手から取った駒を、自分の駒として再使用するというのは日本だけです。日本独特のルールは海外でも人気が高まっています。海外でも色紙をプレゼントし、将棋の神髄を字に込めています。

最近、悔しかったことがあります。「将棋電王戦」で、プロ棋士とコンピューターが対戦し、1勝3敗1分けで、人間が負けてしまったことです。悔しくて仕方がない、機会があれば、挑戦したいと思っています。コンピューターがいくら精緻でも、人間の指す将棋のような感性、温かみは出せないからです。それは手書き文字も同じで、人間の温もりを伝えていきたいです。

私事で言えば、今の時代、仕事をするうえで、パソコンは必需品になっています。これは時代の流れでしょう。でも、時間があれば、できるだけ、自分の手で書きたい。年賀状は毎年、1300枚ほど書いていますが、あて名と住所は手書きにこだわっています。一字一字、書いているうちに、相手の顔、表情が浮かんできます。そんなところにも、日本文化の一面が宿っているのかも知れません。

好きな言葉に「先人木を植え、後人蔭を得る」という言葉があります。日本の文化の継承者として、守っていきたい。

墨と筆を使う「書」に関して言えば、ただ、美しく仕上げるだけでなく、硯に水を入れ、じっくりと時間をかけて墨をすって、徐々に濃くしていく。凝縮した時間に、心を落ち着け、そして、書と向き合う。気持ちが集約され、そこに深い意味があるのでは、と思ったりします。

高野山の宿坊では、最近、若い人の間で、写経を希望する人が増えています。写経は心身を集中させ、雑念

若者にも写経が人気

人間国宝
大夫 氏

生まれ。重要（人間国宝）、藝術院会員。

と思ったらあきまへん。無の心にならなあかんのです。なかなか無の心にはなれんけどね。子どもの頃から文楽や歌舞伎、寄席や芝

密教の聖地、高野山を開いた弘法大師（空海）は、橘逸勢、嵯峨天皇とともに「三筆」と呼ばれた能書家です。日本の書道の礎を築き、「書」を芸術としての高みにまで導きました。私は、その高野山で生まれ育ったので、幼い頃から、書の文化を身近に感じてきました。

弘法大師は、ご存じのように、遣唐使として中国に渡って、中国文化の理解においても、頂点に立った人物です。だけど、それにとどまらず、晋唐の書の和風化に努め（例えば「いろは歌」）、日本に文字文化を定着させました。その精神を私たちがいかに継いでいくかが、大きなテーマだと思っています。

少し唐突な例えになるかも知れませんが、洋式トイレをみてください。元々、外国から来たもので、それに手を加えて、日本でウォシュレット（温水洗浄便座）が考案された。今、ヨーロッパの人は、そんな日本のトイレに感銘を受けているという話を聞きます。それぐらい、日本人はいいものを取り入れ、それを和風化して、さらによりいいものに発展させるのがうまい。

てくれる。各界で、活躍する著名人に、書くことの楽しみや、味わい、意味を語ってもらった。

芸も書も無の心で

文楽太夫・人間国宝
竹本 住大夫 氏

1924年、大阪市生まれ。重要無形文化財保持者（人間国宝）、文化功労者、日本藝術院会員。

文楽の道に入って67年、89歳になります。この世界で自分が一番年上になるとは思わんかったね。平成24年（2012年）7月に脳梗塞で倒れて入院して、辛いリハビリをしながら翌年1月に復帰しました。文楽は、太夫・三味線・人形の3つの要素で構成される伝統芸術です。なかでも義理人情を浄瑠璃で語る太夫がしっかりせんとあきまへん。でも、口も思うように動かなくなって、「なんでこんなことが言えまへんねん」、言語のリハビリでは、2度泣きましたけどね。舞台に出な、あかんという目標があるから頑張れたんです。

語る時は、床本（台本）を見ます。戦争で、だいぶ焼けましたけど、明治時代や、それ以前に太夫が書いたものが残ってる。浄瑠璃字いう大きな太い字で書いてましてね、似てるけど勘亭流やないんです。これだけ大きな字書いとかんと、息をいっぱい出して大きな声出されへんのですわ。当て字が多いし、句読点やカッコもない。普通の人から見たらけったいな字でしょ。

でも、うまい字で書いてある床本を見てると、自分もうまく語れるように思いますね。これがパソコンの字では、絶対に語れませんな。字配りが悪くて文章の区切りが、中途半端になってしまうし、弟子にもやらしてますけど、下手でも自分の手で書いて覚えんと。でも僕は、あんまり字が下手やから、新作なんかで床本がない時は、嫁はんに書かします。かっこ悪いですね。

字は体を表すといって、人間性というのが表れてくる。気持ちを込めて、うまいこと書こうと思わずに、自然と筆が動くように書くと、自分の人生の歩み方が自然と字に出てくると思いますね。いい字や文章を書こうと思わんと、自分の今までの経験、自分の思ってることを素直に書く。ええかっこしたらあきまへん。

芸も一緒。舞台出て、ここでお客さんを泣かそうとか笑わそうとか、そんなこと思ったらあきまへん。無の心にならなあかんのです。なかなか無の心にはなれんけどね。子どもの頃から文楽や歌舞伎、寄席や芝居が大好きで、父（六世・竹本住大夫＝人間国宝）に反対されながらもこの道に入ったのが21歳。それでも、浄瑠璃ってええなあ、ようできてるなあって思えるようになったのは60歳を過ぎてからやね。それまでは、がむしゃらにやるばっかり。しっかり稽古積んで基本に忠実に素直にやってたら、評価してもらえるようになるんです。

文楽の公演は、20日前後やってますけど、「今日は、ようやれたな」と思う日は、1日か2日。100点満点は取れんのです。これでええという終点はないので、いつも考えて迷ってますな。死ぬまで稽古、死んでからも稽古です。苦労はついて回るけど、好きなことして一生送れるのは幸せでんな。

僕の大崇拝してる人がね、もう亡くなりましたけど、奈良・薬師寺管主の高田好胤さん。腹割って2人でよう話してましたな。僕が人間国宝になった時（平成元年・1989年）に、もらった書は、額に入れて飾ってますけど、それが字でありながら絵にもなる、いい字です。そう見えるのは人間ができてるからですね。あの方の法話は、時には涙、時にはユーモアがあって、人を引きつけるんです。僕も、はよ人を引きつける浄瑠璃を語らないかんと思てます。

若者にも写経が人気

高野山真言宗
宗務総長
添田 隆昭 氏

1947年、和歌山県高野町高野山生まれ。総本山金剛峯寺執行長、高野山学園理事長。

空海の聖地、高野山を開いた弘法大師（空海）は、橘逸勢、嵯峨天皇とともに「三筆」と呼ばれた能書家です。日本の書道の礎を築き、「書」を芸術としての高みにまで導きました。私は、その教えを受けて、写経を日本の文化にまで高めた人物です。だけど、それにとどまらず、晋唐の書の和風化に努め（例えば「いろは歌」）、日本に文字文化を定着させました。その精神を私たちがいかに継いでいくか、ということです。

日本の文字文化も歴史とともに、発展してきましたが、近年、ワープロ、パソコンなどの普及もあって、衰退するのではないかという危惧を感じます。若い人だけでなく、年配の人も手書きで字を書く機会が減っています。これは嘆かわしいことだと思います。だからこそ、手で書くことによって、文字の持つ美しさや、美意識を育むという伝統を大切にしたい。

手紙で〝人と人〟実感

作家
湊 かなえ 氏

1973年、広島県因島市（現・尾道市）生まれ。小説推理新人賞、本屋大賞、日本推理作家協会賞短編部門受賞。

1996年（平成8年）から、2年間、青年海外協力隊としてトンガに行きました。テレビもないので、夜は時間があるし、日本語が恋しくて、日本にいる家族や友人に毎晩のように手紙を書いていました。

友人との手紙の中で、一年中、暑い国だと「暑い」を意味する言葉がたくさんあるんじゃない、という話になって、意識してみると確かに多い。昨日と今日、さっきと今、私にとっては同じ暑さでも、現地では5種類くらいの言葉で表されていました。それに対して「寒い」を表す言葉は一つしかないんです。日本語は何種類あるのかな、などと言葉についていろいろ考えました。それが今、小説を書く時にも、つながっています。

小説を書き始めたのは、30歳を過ぎてから。子どもの頃から空想することが好きだったので、それを文字で表してみると、もっと面白いのではないかと思っていました。フィクションだからこそ、物語の行きつく先を妥協せずに追求したいという思いが、デビュー作の段階からあります。「イヤミス（読後、嫌な気分になるミステリー）の女王」と呼ばれるのはあまり嬉しくないのですが、『告白』をたくさんの方々が読んで下さったという結果だと思いますので、今後、このイメージを塗り替えるような作品にも挑戦したいと思います。

原稿はパソコンで書き、手直しなどで編集者の方とやりとりする時は、締め切りぎりぎりでも必ず手書きの手紙を添えています。相手からも手書きでお返事をもらえると、人と人とで仕事をしているなあ、と実感できますね。活字だと業務連絡という感じになってしまいますが、手書きだと普段メールで書くよりも一歩踏み込んだ感想や出来事が書けて、話がふくらむこともあります。

手書きに関することでは、（帰国して）高校の家庭科の非常勤講師になりたてのころ、ある男子生徒に黒板に書いた文字を「汚い」と言われてしまった思い出があります。その一言以来、文字は人に見せるものという意識が生まれて、絶対に汚いと言われないように黒板には気合を入れて書いていましたね。

実は、夫の父が書道家です。夫もその手ほどきを受けていて、基礎がしっかりとした文字を書きます。結婚式などで名前を書く時、自分で書けたらいいなと思いながらも、夫が書いてくれるのでなんとかなりましたが、作家になってからは苦労しています。

新作の出版に合わせて、書店でサイン会があるんです。来て下さった方のお名前も書くので、それがあまりにも汚い字なのは失礼かなと思って、ペン字を練習しました。横棒の長さはこと、ここが同じ……なんて教本を見ながら練習するんですけど、基礎ができていないので難しい。基礎を理解した上で文字を崩すという「文字で遊ぶ」ことにも憧れます。

パソコンを使わず、手書きのものだけで短編集を作ってみるのも面白いかもしれませんね。書くペースが変わるので、考える速度やそこから生まれるニュアンスも変わるんじゃないかと思います。手書き原稿とは言わずに、そっと出して、今までの作品と違うと気づいてもらえるといいですね。

大きな夢 筆に託し前進

第9回 手書き文字ばんざい！

「第9回手書き文字ばんざい！」は平成25年(2013年)10月20日、大阪市中央区のOMMビル展示ホールで開催され、約250人の親子らが参加しました。今回のテーマは「前進」。熱気に包まれた会場で、参加者らは、思いを込めて、それぞれの文字を書き上げました。

平成25年の「第67回日本書芸院展（役員展）」で、魁星作家に選ばれた池田毓仁・本院理事の揮毫で大会がスタート。参加者が見守る中、『夢と歩む』という文字を力強く書き上げました。池田理事は「自分の夢、友達との夢、家族の夢、地域の中での夢、いろいろな夢とともに、皆さんが努力して歩んでいってほしいという願いを込めた」と話しました。

続いて、主催者を代表して、読売新聞大阪本社の窪田邦倫・常務取締役事業本部長が「パソコンや携帯電話の普及で文字は書くよりも打つ時代になっていますが、そうやって書かれた文字はどれも同じ。手書き文字は一人一人違い、書いた人の心や表情が表れます。今日は、思いを込めて、楽しく、思いっきり文字を書いて下さい」とあいさつしました。

その後、参加者たちは、楷書、草書など様々な書体で書いた『生』『志』『創』『進』『達』『勇』など字の手本を見ながら、書き上げていきました。1枚の紙に繰り返し練習したり、展示用に提出する文字を話し合いながら選んだりと、時には真剣な、時にはにぎやかな光景が広がっていました。親子や祖父母、友人同士で書く組もあり、幅広い世代で書くことの喜びや楽しさを感じていました。

この日、参加者が書いた作品を提出した後、「第8回全日本小学生・中学生書道紙上展」と「第18回全日本高校・大学生書道展」の優秀者による学生代表揮毫がありました。小学1年から中学3年までの各学年の代表9人と、高校・大学生の代表4人の計13人が会場中央に集まり、↖

親子ら250人にぎやかに

一字一字、丁寧に書き上げると、会場は大きな拍手に包まれました。

最後に、高木厚人・本院副理事長が「皆さんが一生懸命、集中して文字を書く姿を見て素晴らしいと思いました。集中して書くということは、自分の生活をしゃきっとさせ、日本の伝統文化を守ることにもつながります。今日の楽しさを友達にも話し、いろんな場所で伝えていってください」と話し、大会を締めくくりました。

全員に記念品として配られたカレンダーには、参加者が思い思いの字を書いて持ち帰りました。また、会場後方には大きな白いパネルが4枚用意され、自由に寄せ書きされました。墨や絵の具、フェルトペンを使い、「笑顔がいちばん」「いつまでも友達」などのメッセージがカラフルな色で書き上げられ、パネルの前で記念撮影をする姿も見られました。

小学3年生から始まった「書写」の授業がきっかけになり、家族で参加した岡田和珠ちゃん(8)は、『生』という字を書きました。「払ったり細くしたりするのが難しいけれど、字が楽しく勉強できる書道は好き。気持ちを込めて書けるようになりたい」と話していました。書道教室の先生や友人とともに参加した高橋陽子さんと照磨君(6)の親子は、「子どもが筆を持つところをあまり見る機会がなかったけれど、ダイナミックな字を書くので驚いた。うまくなくても堂々とした字を書ける子になってくれれば」と陽子さん。

漢字が大好きという照磨君は「百ねん生きる」と書いたカレンダーを祖父母へのお土産にすると話していました。参加者が思い思いに楽しみながら、手書き文字の素晴らしさを実感できるイベントになりました。

力強さに「すごい！」

「第9回手書き文字ばんざい！」の作品は、平成25年（2013年）11月22日から24日まで、大阪市中央区のNHK大阪放送局1階アトリウムで展示され、約370人が見学しました。来場者らは「小さい子でも上手に書いていて驚いた」「それぞれの個性が出ていて面白い」「自分も筆で文字を書くので勉強になる」などと話していました。魁星作家の池田・本院理事と学生代表の作品も注目を集め、子どもたちは、口々に「すごい」と声を上げながら、手書き文字の力強さを感じていました。

大阪で作品展示

参加者の声

※「参加者の声」は平成25年（2013年）10月26日付読売新聞夕刊から。年齢、学年は掲載当時。

会場で参加した感想を聞いた。

まだ習っていない「志」の書写に挑戦した大阪市旭区の小学2年、新海隼星君（8）「7、8枚目から思う通りに書けたし、『心』の部分がきれいになったのが、うれしかった。字を書くときはドキドキするけど、うまく書けると楽しいです」

この日が誕生日だった大阪府東大阪市の小学4年、嶋田夢実さん(10)「（名前にある）夢という字を先生が揮毫したので、とてもうれしかった。近くで見ると格好良くて、いつかあんな字が書けるようになりたい」

書道教室に通う兵庫県姫路市の小学6年、髙田澪さん(11)「いつもの教室とは違い、たくさん人がいるので緊張した。もっと練習して、最高の賞を取れるくらいレベルアップしたい」

大阪府茨木市の中学1年、仙波一輝君(13)「きれいな字が書けた時の喜びが大きくて、書道を続けている。今日は名前の『輝』を書き、絵の具で彩ってカレンダーを作れたのがよかった」

長女の花さん(11)と参加した堺市西区の主婦、竹田由香さん(40)「今年で3回目になり、このイベントはもう、わが家の風物詩。代表揮毫のような大作が仕上がる様子を間近で見られるのもここだけ。今では書道が共通の趣味になっている」

子ども3人と初参加した大阪府和泉市の出原廣太さん(40)「娘が通う小学校から紹介されて来た。普段はテレビゲームばかりしている子が、書道にチャレンジでき、いい経験になった」

【主催】公益社団法人日本書芸院、読売新聞社
【後援】文部科学省、大阪府教育委員会、大阪市教育委員会、NHK大阪放送局、読売テレビ
【協賛】あかしや、大阪市教員会館、呉竹、サクラクレパス、ゼブラ、トンボ鉛筆、パイロットコーポレーション、ぺんてる、墨運堂（50音順）

第8回 全日本小学生・中学生書道紙上展

日本書芸院と読売新聞社主催の「第8回全日本小学生・中学生書道紙上展」（平成25年・2013年）は全国から1万7523点の応募があり、各学年ごとに「ベスト100」「準ベスト100」が選ばれた。優秀作品45点（各学年5点）を紹介する。

若い感性 紙面に躍る

小学1年

小一 安達 舞（京都・桂坂）

一ねん 阿部 莉音奈（兵庫・的形）

一ねん 翁 さくら（鹿児島・名山）

一ねん 長田 一颯（山梨・御坂西）

小一 師岡 杏奈（福岡・那珂）

小学2年

小二 岡村 優（岡山・福田）

小二 具志 美佐都（沖縄・高良）

小二 小松 莉緒（大阪・玉手）

小二 菅谷 拓矢（福井・神明）

小二 向井 彩珠（兵庫・霞ヶ丘）

小学3年

小三 大和田 みみ（埼玉・さとえ学園）

小三 田中 小綯（福井・木田）

小三 野田 悠斗（愛媛・立花）

小三 松岡 来実（兵庫・揖保）

三年 目崎 那奈（岡山・ノートルダム清心女子大付属）

小学4年

四年 石津 志乃（福岡・津屋崎）

小四 伊勢 悠希（香川・櫃石）

小四 鍛治 夏希（香川・城辰）

小四 窪田 真衣（山梨・甲運）

四年 津曲 真衣（鹿児島・鹿児島大教育学部付属）

小学5年

小五 上田 夏瑠（和歌山・保田）

小五 小川 恭佳（岡山・吉備）

小五 西田 真知（兵庫・誉田）

小五 羽木 遥香（三重・四日市中部西）

小五 真木 芙美香（岡山・大元）

小学6年

小六 井上 琴未（和歌山・鳴滝）

小六 上田 知佳（香川・さぬき中央）

小六 上西 悠月（兵庫・坊勢）

小六 東 優花（和歌山・中貴志）

六年 松本 望（千葉・北条）

中学1年

中一 東 美里（和歌山・西浜）

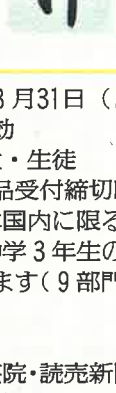
中一 大和田 みみ（埼玉・さとえ学園）

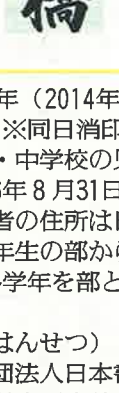
中一 胡内 香保（奈良・安堵）

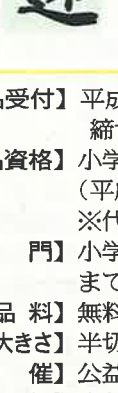
中一 塩井 皓太（香川・香川大教育学部付属坂出）

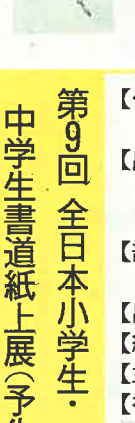
中一 恒吉 真里那（鹿児島・紫原）

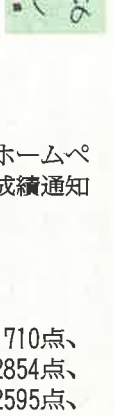
中学2年


中二 礒部 星凪（福井・粟野）

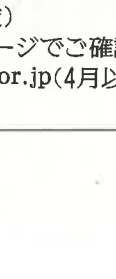

中二 川中 優菜（福井・足羽第一）

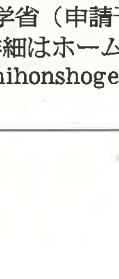

中二 小西 柚花（奈良・畝傍）

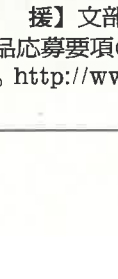

佐藤 奈未（鳥取・尚徳）

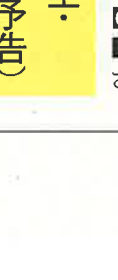

菅原 夢花（三重・富田）

中学3年


姉川 由佳（福岡・青陵）


中三 今井 啓聖（青森・平賀西）


山本 佳子（福岡・鞍手南）


瀬本 陽加（山口・安岡）

中上 夏帆（岡山・岡山操山）

【審　査】
日　時　平成25年（2013年）9月24日（火）
会　場　OMMビル2階　会議室
審査員　本院理事長・杭迫柏樹、本院副理事長・黒田賢一、吉川蕉仙、今村桂山、真神巍堂、高木厚人、横山煌平、読売新聞大阪本社常務取締役事業本部長・窪田邦倫

【選考内容及び賞】
一、全作品から各学年優秀作「ベスト100」・「準ベスト100」を選び認定証を授与。
二、図書カードは各学年「ベスト100」・「準ベスト100」受賞者に贈る。
三、ベスト100受賞者作品を掲載した小中展新聞を出品者全員に贈る。

【成績発表】
11月中旬。読売新聞紙上及び本院ホームページにて発表、12月中旬各代表者に成績通知を郵送。

出品点数　1万7523点

学年別
小学1年生　961点、小学2年生　1710点、
小学3年生　2462点、小学4年生　2854点、
小学5年生　2732点、小学6年生　2595点、
中学1年生　1691点、中学2年生　1423点、
中学3年生　1095点

第9回 全日本小学生・中学生書道紙上展（予告）

【作品受付】平成26年（2014年）8月31日（日）締切　※同日消印有効
【出品資格】小学校・中学校の児童・生徒（平成26年8月31日作品受付締切時）※代表者の住所は日本国内に限る
【部　　門】小学1年生の部から中学3年生の部まで、各学年を部とします（9部門）
【出 品 料】無料
【紙の大きさ】半切（はんせつ）
【主　　催】公益社団法人日本書芸院・読売新聞社
【後　　援】文部科学省（申請予定）
■作品応募要項の詳細はホームページでご確認下さい。http://www.nihonshogeiin.or.jp（4月以降）

第18回 全日本高校・大学生書道展

力強く伸びやかに

「第18回全日本高校・大学生書道展」(平成25年・2013年)は漢字、かな、調和体(漢字、かな交じり文)、篆刻の4部門に計1万282点の応募があった。最高賞の全日本高校・大学生書道展大賞に51点が選ばれたのを始め、同展賞353点、優秀賞784点が決まった。以上の3賞受賞作品計1188点は同年8月20日から25日まで大阪市立美術館(大阪市天王寺区)で展示され、最終日の25日に大阪国際交流センター(同)で授賞式が行われた。

安田女子大1年(広島県)中井由美子【呉竹賞】

大東文化大2年(東京都)滑田一輝【カタナヤ蒼頡菴賞】

(部分)

ノートルダム清心女子大3年(岡山県)木村好秀【墨運堂賞】

大阪教育大大学院1年(大阪府)太田菜津子【松楳園賞】

近畿大付和歌山高3年(和歌山県)伊藤千晴【みなせ筆本舗賞】

立命館大3年(京都府)大和優作【一休園賞】

帝京大4年(東京都)大石麻里【日本書芸院賞】

姫路南高1年(兵庫県)山角実留【賛交社賞】

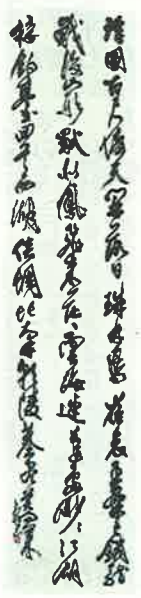
米子工業高専3年(鳥取県)秦瑞希【日本書芸院賞】

中京大3年(愛知県)片岡祥泉【高山草月堂賞】

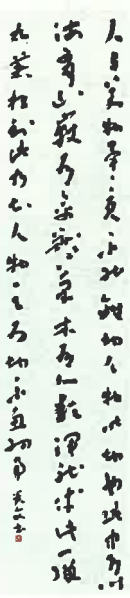
大東文化大4年(東京都)北山未晨【松魁堂賞】

明誠学院高2年(岡山県)名畑亜佳里【日本書芸院賞】

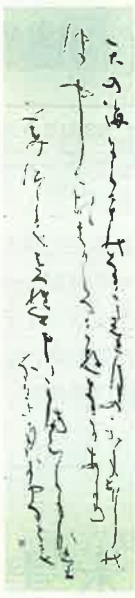
福岡高3年(岩手県)奥澤咲輝【久保田号賞】



福岡雙葉高1年(福岡県)廣瀬茉莉【日本書芸院賞】



東福岡高3年(福岡県)後藤翔雲【クリモト賞】



奈良教育大大学院2年(奈良県)柳澤美希【天山賞】

大東文化大4年(東京都)湯淺圭祐【松林堂賞】

同志社大3年(京都府)氏原令賀【天義堂賞】

京都教育大3年(京都府)眞田裕太【雪江堂大阪賞】

花園大4年(京都府)西川舞【平助筆復古堂賞】

松山大4年(愛媛県)西森貴文【あかしや賞】

【審　査】
日　時　平成25年(2013年)7月15日(月・祝)
会　場　マイドームおおさか　1階
審査員　読売書法会常任総務・新井光風、樽本樹邨、本院理事長・杭迫柏樹、本院副理事長・黒田賢一、吉川蕉仙、今村桂山、真神巍堂、高木厚人、横山煌平、読売新聞東京本社常務取締役事業局長・久保博、読売新聞大阪本社常務取締役事業本部長・窪田邦倫

【審査結果】

個人賞	全日本高校・大学生書道展大賞	51点
	全日本高校・大学生書道展賞	353点
	優秀賞	784点
	準優秀作品	2052点
	優良作品	7042点

出品点数　1万282点

○種別
第1種　5597点
(2×8、2.6×6、4×4)
第2種　4317点(全紙、聯落)
第3種　368点(篆刻)

団体賞	高等学校の部	
	最優秀校	奈良県立桜井高等学校(奈良)初
	優秀校2位	岩手県立福岡高等学校(岩手)
	優秀校3位	和歌山県立桐蔭高等学校(和歌山)
	第4位	大分高等学校(大分)
	第5位	東福岡高等学校(福岡)
	第6位	岩手県立水沢高等学校(岩手)
	第7位	鹿児島県立武岡台高等学校(鹿児島)
	第8位	明誠学院高等学校(岡山)
	第9位	盛岡市立高等学校(岩手)
	第10位	兵庫県立姫路南高等学校(兵庫)
	〃	岩手県立盛岡第二高等学校(岩手)
団体賞	大学の部	
	最優秀校	四国大学(徳島)3回目
	優秀校2位	京都橘大学(京都)
	優秀校3位	奈良教育大学(奈良)
	第4位	大東文化大学(東京)
	第5位	中京大学(愛知)
	第6位	立命館大学(京都)
	第7位	大阪教育大学(大阪)
	第8位	岐阜女子大学(岐阜)
	第9位	帝京大学(東京)
	第10位	京都教育大学(京都)
	〃	花園大学(同)

第19回 全日本高校・大学生書道展(予告)

【作品受付】平成26年(2014年)6月15日(日)締切　※同日消印有効　必要資料をご請求の上、作品とともにお送り下さい。
【出品資格】高校・大学等の在籍者(平成26年6月15日現在)。ただし、25歳まで　※代表者の住所は日本国内に限る
【会　　期】平成26年8月19日(火)～24日(日)
【会　　場】大阪市立美術館地下展覧会室(天王寺公園内)
【主　　催】公益社団法人 日本書芸院・読売新聞社
【後　　援】文部科学省(申請予定)
◇陳　　列　大賞・展賞・優秀賞を陳列します(約1200点)。
◇授 賞 式　展覧会最終日に授賞式・祝賀パーティーを開催します。
■作品応募要項の詳細はホームページでご確認下さい。http://www.nihonshogeiin.or.jp　(4月以降)

平成25年 全国シルバー書道展

（2府7県で開催）

豊かな経験 にじむ作品

平成25年（2013年）の「全国シルバー書道展」は、大阪、奈良、岡山など西日本の2府7県で催された。大阪展は、会場を前年までのOMM（大阪マーチャンダイズ・マート）ビル展示場から、大阪市立美術館に移して開催、52年に当たり、多くの書道ファンでにぎわった。大阪、広島、三重、兵庫、岡山展では、百歳を超える人からの出品もあった。今回は、歴史的にも書道文化の伝統が根付いている奈良会場を紹介する。

格調高い作品が並ぶ奈良展

格調高い493点

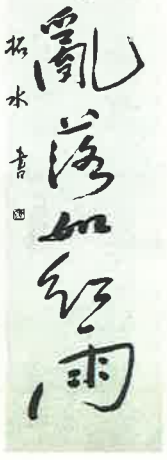
奈良展

第25回奈良展は、奈良市登大路町の奈良県文化会館2階展示室で、5月24日から26日まで3日間、催された。出品作品は493点で、前年より27点減ったが、力作が並び、来場者を魅了した。

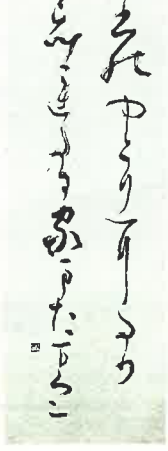
奈良は、書道の盛んな土地柄。出品者の中には本格的な指導を受けた人も多く、高齢者だけの展覧会とは思えないような、格調の高い作品が目立った。

最高齢者は男性が90歳の坂本奇峰さん（奈良市）、小川拓水さん（大和郡山市）。女性は93歳の藤井美宝さん（香芝市）。坂本さんは楠木正成をたたえた河野天籟の七言律詩「大楠公」をかっちりした実直な字風で書いた。

▶大楠公をたたえた七言律詩の坂本さんの作品



▶李賀の詩を書いた小川さんの作品



▶人麻呂の歌を書いた藤井さんの作品

小川さんは唐の詩人、李賀の詩から「桃花乱落如紅雨」（意味＝桃の花は乱れ落ち、紅の雨のようだ）と書き、しっかりした文字の線が秀逸だった。

藤井さんは「草枕たびのやどりに……」と柿本人麻呂の歌を半切に二行書きした。

ほかにも、文部省唱歌『茶摘み』の一節「夏も近づく八十八夜……」、人生の奥深さを表現した「無事是貴人」など自身の心境や懐かしさを表現した作品もあった。

本院の福祉生涯学習部長、三岡天邑常務理事は「書写ではなく、美を求めた力作が多い。作品づくりがうまく、勢いが感じられました」とハイレベルな奈良展を評した。

平成26年（2014年）「全国シルバー書道展」（予告）

第26回広島展	1月5～6日	広島県民文化センター
第27回大阪展	2月11～16日	大阪市立美術館 地下展覧会室
第27回三重展	2月20～23日	津リージョンプラザ
第27回京都展	2月28日～3月2日	京都文化博物館
第27回滋賀展	4月25～27日	大津市歴史博物館
第26回奈良展	5月23～25日	奈良県文化会館
第27回岡山展	10月8～13日	天満屋岡山店・葦川会館
第27回兵庫展	10月25～26日	県立美術館・原田の森ギャラリー

※和歌山展は隔年開催

伝統と創意

公益社団法人 **日本書芸院**

■展覧会

＜日本書芸院展＞

日本書芸院社員相互の共励琢磨による「書」の本質的研究を通して、後進の育成に尽力しています。

●日本書芸院展（役員・役職者展）会場：大阪国際会議場（大阪市北区）
●日本書芸院（四月展）（六月展）
会場：大阪市立美術館地下展覧会室（大阪市天王寺区）
●特別企画展・海外展

＜その他の企画展＞

小学生からシルバー世代まで、全世代を網羅する書道展を開催して、書の啓蒙と普及、我が国文化の継承・振興・発展のために活動しています。

●全日本小学生・中学生書道紙上展　読売新聞紙上および小中展新聞紙上
●全日本高校・大学生書道展
会場：大阪市立美術館地下展覧会室（大阪市天王寺区）
●全国シルバー書道展　近畿2府4県および三重・岡山・広島県で開催

■講習会

●記念講座
●教養講座
●「手書き文字ばんざい！」
（文字・活字文化の日記念イベント）

■出版

●作品集・図録
●会報
●研究誌・記念誌
●広報紙

広報紙「書くよろこび」を無料でお届けします

「書くよろこび」は、書くことのよろこびや楽しさを広く一般の方にアピールし、書写書道のより一層の振興と発展を目的とした無料の広報紙です（年1回発行、50万部）。書道教室や部活動、展覧会場など、書や文字に関する様々な場面で配布、活用していただいています。送料無料でお届けいたしますので、ご希望の部数と送付先を日本書芸院事務所へお申し込み下さい。お待ちしています。

■沿革と概要

昭和21年（1946年）11月創立
昭和22年（1947年）5月、社団法人の認可を受ける
平成18年（2006年）創立60周年を迎え、平成22年（2010年）6月に公益法人制度改革により、内閣府から公益社団法人の認定を受ける

■現在、北海道から沖縄まで全国に約1万5千人の社員を擁する我が国屈指の書道団体であり、社員の中から、文化勲章受章者3名（故村上三島、故杉岡華邨、髙木聖鶴）をはじめ文化功労者、日本藝術院会員、日本藝術院賞受賞者、日展や読売書法展など全国規模の大公募展の役員・審査員を務める著名な書道芸術家を多数輩出しています。

■毎年、公募を含めた書展や企画展、各種の講習会・講演会を開催しています。

〒540-6591　大阪市中央区大手前1丁目7番31号OMMビル7階　TEL 06-6945-4501　FAX 06-6945-4505
Eメール info@nihonshogeiin.or.jp　ホームページアドレス http://www.nihonshogeiin.or.jp/

制作　大阪読売サービス（株）